

部会だより

予測研究部会

この研究部会は1970年の春5月に結成、まもなく2年の活動期間を終わろうとしている。需要予測とか経済予測など狭い意味に限定しないで、“予測”研究部会と名づけたのには、それなりの意味をもたせるつもりが秘められている。実際に活動を始めてまとまってきた意見は、あまり他所でやられていないような、しかもかなり広汎な方面を含む仮想商品の予測を実施してみようということであった。種々検討の結果、“20年後の住宅”の予測という未来学めいてはいるが、しかしOR的に考えても大いに追及すべきところの多い問題がとり上げられることになった。漠とした問題をいかにbreak downしてゆくか、また多くの要素から構成されていて、その一つ一つは従来の予測方式でゆけるとしても、全体としてどのように結合して整合性のある結論を最後に導き出すべきかなどは、まさにORの重要な一面とみてもよいはずである。こんな意味から、選んだ問題は、好個の研究課題の一つになりうるであろう。

発足以来、原則として月1回の研究集会は忠実に実行され、多数の会員の参加をみた。しかし、あまり切実性のある問題とも映らなかつたためか、出入りがやや激しく、次にかかげる人達が常連と目されるメンバーとなっている。

西野（主査・早大）、松島（幹事・電々公社）、松崎（日本IBM）、児玉（日本電気）、村中（運輸調査局）、鈴木（中部電）、岡崎（三菱化成）、馬越（大林組）、塚本（東工大）、大野（東燃）、その他。

このほかに、住宅を専門とする人の意見を参考とするため、会員外の人にも参加してもらおうこともある。

さて住宅予測といえば、20年後に住宅不足数がどうなっているかを予測することかと早合点されそうであるが、当研究部会でとりあげている問題は、もっと人間味を考慮する基本的なことなのである。日本人の平均的な人達が住むということに対する意識をどのような形で表現してゆくことになるだろう

かという推論である。住むということの意味には多面性がある。安らぎも必要なら団らんも必要である。したがって、住宅のもつ機能もまた多面的であろう。われわれは、いくつかの要素に分けてこれをながめようとしている。広さ、娯楽、衛生、働く、食べる、商品性などがそれである。これらはいずれも、今日的表現でいえばソフトなものである。状態変数とでもいっておこう。これに対する測定可能な、対応的にいえばハードな要素は、使用材料、衛生設備、食品、労働時間、楽しみの設備、建築費その他が考えられよう。もちろんこのほかに、環境が大きな支配要因になることは否定できない。われわれの目ざすところは、前記のソフト要素の各々が将来どのように変容し、それらが結集したらどのような住宅欲求になるであろうかという、需要者側からの一つの理想像を求めてみることである。ソフト面だけの推論は、未来学として花々しくとり上げられてきた時期もあったが、われわれはこれを、ハード面との結合を通じてより整合性のある予測にしたいと考えている。この主旨に適合する理論として、カルマン・フィルタの理論が提案された。すでにこの理論は、宇宙工学においてかなりの実用価値を發揮したといわれる。はたして社会学面においても十分な実用価値を發揮してくれるかどうか、これからの問題と考えられるのであるが、当研究部会では、現在住宅問題に対してこの理論の適用をあえて試みようとする努力しているのである。状態変数の変化に関係する遷移マトリックス、状態変数と観測変数とを関係づけるマトリックスのとり方いかんによって、結果が信頼性のあるものになるかどうかが大きく左右されるが、この場合には、結果そのものが問題であることのほかに、適用の方法それ自身もまた問題の一つと考えている。作業の能力を十分にもっているわけではないので、進捗は必ずしもほかばかしくないが、なにがしかの結果は期待されうると考えている。そしてメンバー全員は、許される限りもう1年の研究期間の延長を希望しているところである。

（西野、松島）